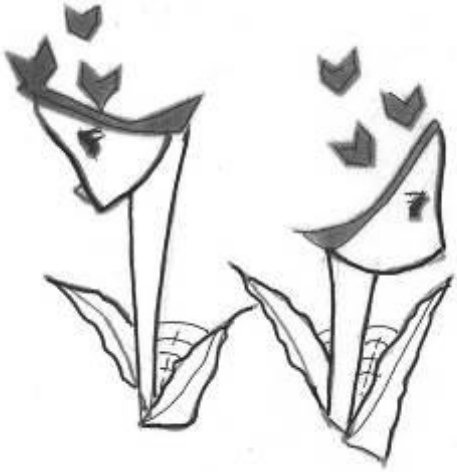
話(わ)じゃれ（21）

岐久　ようこ

ビクともしない

見上げるほどの
「セイタカアワダチソウ」
２メートルもあろうか
晩秋になってもまだ盛んに咲く
空き地のそこら中を占領し
「花粉を撒き散らす」と嫌われたもの
どんなにドケてドケやと言われても
「私は動けないもの」
５本、７本とかたまって家族従がえ
今や直立不動のままビクともしない
太い幹に守られて堂々と
「日本に帰化しました」
まあ、よく見ると逞しいですこと
そんな姿の足元で
「１１月ですがあと少し」と朝顔がまだ咲く
ちょこっと霜を浴びて赤紫の花
みすぼらしくなった蔓の先を草に絡ませ



道端を通る人を見やり
「皆マスク着用だなあ」
「これ霜よけかな？」
朝顔は不審がったもの

春になり　芽がさめた　草木たち
道を行く　顔のマスクが　気にかかる

世界を沸騰させたのは

炎のようなゴッホの絵
彼は、南フランスの地が好きで
「ひまわり」と「糸杉」を相棒のように描く
「これしか描けないでは」
貧乏がつきまとう彼にいつも暖かい目を注ぎ
援助を惜しまなかったのが、弟（画商）の妻です
「画材もいるだろうし」
「モデルを使って描かせたい」
彼女は生活費を渡すよう夫に頼む
絵が売れずゴッホの心身は衰弱しきって
やがて
兄が逝くと後を追うように弟も
「どうか慈悲を」
彼女は、夏の名残りのある日
部屋を片付けしていて
兄が弟に出した手紙の束を見つけた
８００通という半端でない数
「文章が優れている！」
「手紙がオモシロイ！」

ゴッホの隠れた一つの才能に感嘆しきり
「この手紙を書簡集として出そう」
まず、そこからゴッホの名前が世にでたようです

生前に　一点しか　売れなかった
その陰で　人妻のあつーい　おかげあり

中村錦之助の当り役

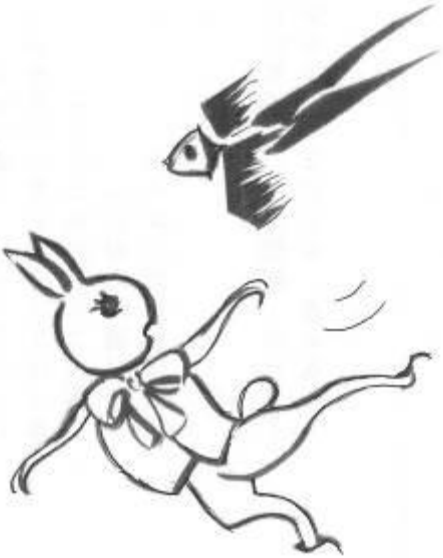
シトシト・ピッシャン
と今夜も雨が降る
３才の大五郎を家において
父は出かける
「父の仕事は何やろな」
涙かくして人を斬る
幼子にそんな姿は見せられぬ
男ヤモメの「子連れ狼」
昼間は乳母車に大五郎のせて歩く
乳母車は子育てに欠かせず
以前から「補助輪」が付いたものも
ありましたが
乳母車に補助輪というのは
支援金を受け取るカゴなのか
「一人親の家庭には手当てを
厚くして」が国の基本です
コロナ禍で一律１０万円支給なされて
半年たってもう一回
「一人親には更に支援せねば」

「子ども食堂を開いてやらねば」
国会で質問されていますが

補助輪の　ついた子育て　大変です
乳母車　補助と支援の　たまものです

ツバメのように

大空をフライトしてみたい！
昭和の時代、ある女性が志した
当時女性の定年が３０才とわかっていて
ＡＮＡの客室乗務員に
それが４５才と伸びて
１９８５年の「男女均等法」ができて
６０才となる
そこかしこ４５年間
「ステキな接客人」として慕われ続ける
世界中の街に出れば
是非ほしいと思うお土産があり
出会いも沢山あり
それらを「経験おみやげ」だけとした
「選ばない道のことは考えない」
「結婚よりは」ということかな？
そうきめて新入乗務員８千人に
サービスの指導しつづけてきて
定年に
「こんなに花束もらって」



アーチのような通りを抜けて
客室トップ以下皆さんが送って下さった
航空界はコロナ減便
それを尻目に運が良かった

１１月　定年きっちり　身を引かれ
早辞めて　願った乗務員　いたかなあ